



① 本会の中でも特に咬合と歯科技工に焦点を当てた技工支部の総会に51名が参加した

「第5回 筒井塾咬合療法研究会・技工支部総会」に参加して

——機能的咬合面形態の構築や専用器具を用いた矯正治療など咬合療法の取り組みを提示——

Reporter 広嶋 肇 (京都府向日市/歯科工房 奏 KANADE)

2009年11月23日(月・祝)、株式会社ヨシダ本社(東京都台東区)にて標記大会が51名の参加者を得て開催された(①)。

筒井塾咬合療法研究会とは、筒井照子氏(北九州市八幡西区/筒井歯科医院、②)が主催する筒井塾咬合療法講習会を受講した歯科医師や歯科技工士が、さらに咬合について研鑽を積むために発足させたスタディグループで、現在約500名の会員が所属し、北海道、東京、大阪、九州の地方支部を有するほか、歯科技工士、歯科衛生士専門の職種別に「技工」「衛生」支部も組織している。今回は、技工支部の総会として会員発表のほか「第2回 機能的咬合面形態コンテスト」が行われた。

咬合療法を達成するための実践例が供覧される

会員発表ではまず、田代孝久氏(北九州市戸畑区/田代歯科技工所)が「筒井式スプリント・床矯正装置 臨床応用」をテーマに、矯正装置としても役立つ筒井式スプリントの構造を解説

患者の態癖により起こる歯牙の傾斜、叢生、下顎位の偏位、筋肉のスパズム(痙攣)などが同スプリントによって解消することから、特に初期治療時に有効であると述べた。

次いで、筆者が「同じゴールを目指して」と題して、石膏模型の精度向上を目指したラボサイドからのアプローチとしてピックアップ印象に着目し、透明レジンを用いた個人トレーの製作例を紹介した。

本会インストラクター兼技工支部長の増田長次郎氏(姫路市飾磨区/株式会社カロス)は「機能的咬合面形態を、再考する～歯周・審美・材料との共存を目指して…」をテーマに登壇(③)。機能的な咬合面形態を製作するうえでおさえるべき要素として「補綴装置の適合精度」「補綴装置と歯周組織との調和」「生命感のある審美性の回復」「材料学」を挙げ、臨床例を交えながら各要素の重要性を解説した。また、インプラント上部構造において複数歯を連結させてパッシブフィットを図る方法や、本来歯牙が有する典型的な力

ントウアを補綴装置に付与すべきであることなどを説明した。特に、オールセラミックスによる補綴装置製作を成功させるには、フレームデザインや適応症の見きわめが必要になると述べた。

続いて「ティーアライナー セットアップの実際」と題して発表した大石耕史氏(福岡県久留米市/DENTIC)は、考案に携わった可撤式矯正装置「ティーアライナー」の開発秘話を織り交ぜつつ、セットアップモデルの製作術式を主に着脱方向の観点から説明した。そして、全身バランスを整えることに主眼を置く咬合療法に矯正治療は欠かせないことから、今後は本製品の需要の増加が見込まれるため、本製品の認定歯科技工士の養成が急務であると訴えた。

その後、「第2回 機能的咬合面形態コンテスト」の審査が行われた(④、⑤)。本コンテストは「咀嚼運動から捉えた咬合面形態や咬合療法の理論を形にできているか」「トップダウンリートメントの概念や顎口腔機能を考慮しているか」という観点に基づき、当日の出席者全員で評価を行うものである。いずれもハイレベルな作品であったが、総合第1位には大石真之氏(福岡市西区/株式会社愛歯)が選ばれた(⑥~⑩)。また、筒井氏、増田氏による審査のもと本会の認定技工士検定試験が行われ、内山貴裕氏(奈良県奈良市/医療法人 浦野歯科医院)



② 歯科医師と歯科技工士のコミュニケーションの取り方などについて講義した筒井氏



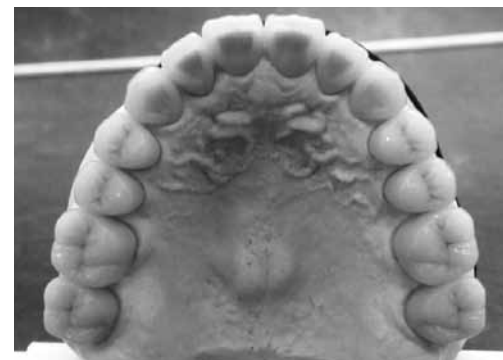
③ 増田氏は歯周組織や材料選択を考慮して構築する機能的咬合面形態の要点を解説した



④、⑤ 「第2回 機能的咬合面形態コンテスト」の審査の様子。筒井氏や増田氏をはじめ出席者全員で出展作品を評価する



⑥ 総合第1位を受賞した大石氏(中央)



⑦、⑧ 大石氏の作品



⑨、⑩ 総合第2位を獲得した西牧 大氏(長野県安曇野市/飯田歯科医院)の作品

⑪、⑫ 総合第3位を獲得した関 由紀子氏(東京都世田谷区/Beaux Arts)の作品

が審査を受けた。

その後、本コンテストに出品された全11作品について筒井氏、増田氏から講評が行われ、模型の読み方やチェアサイド-ラボサイド間のコミュニケーションのあり方などについて解説が行われた。特に筒井氏は、歯列の調和は目視だけでなく手指による確認が肝要であることや両サイドで共通の治療

目標を掲げることが良好な治療結果に繋がることを強調。増田氏は、補綴装置製作時の形態修正のコツとして、口腔内の機能を阻害することなく歯牙単位から歯列単位まで連続性を持った咬合面形態の付与方法を詳説した。

* * *

今回の発表の中でも特に筒井氏、増田氏による講義をとおして、われわれ

歯科技工士は日常臨床において模型に基づいて補綴装置を製作するが、模型の先にいる患者の存在を忘れてはならないことを改めて痛感した。そして、模型からの確かな情報を読み取り、歯科医師や歯科衛生士と密に連携することで、補綴装置の高い適合性や長期維持性を実現させなければならないと強く思った。